助成　日本財団

平成２１年８月９日　親学講座

いじめの根はどこに？

共励保育園理事長

長田先生講演録

お断り

当日の録音にトラブルが起きたため、「保育園のパラドックス」と「子供の発達の特徴」についての説明をさせていただくことで代替えとさせていただきます。

添付資料の「保育園のパラドックス」図と「子供の発達と自分づくり」図については共励保育園のホームページ http://www.kyorei.ed.jp からダウンロードください。

２００９年２月２４日の毎日新聞のコラム「記者の目」で「先生：生徒指導は今」という連載の総集編として学校や子供たちの状況が語られていました。その中で、「教室で教科書を燃やす」「教室から出てタバコを吸う」「トイレで友達を殴る」等々、これは中学校での話ではなく、小学校だというのです。クスリ（麻薬）が小学校に出回るのも時間の問題だということだそうです。とうとう日本もここまで来ました。２００７年度に精神疾患で病気休職となった先生が４９９５人。毎年５０００人もの先生が、心の病で倒れている。５０歳代のベテランの先生が挫折して退職するケースが増えている。このようにして公教育が崩れていく。いま必要なのは、公立の小学校での教育が成り立たなくなったときの恐ろしさを想像してみることです。我が園では、年長児の保護者懇談会などで、いじめや学級崩壊のビデオを見てもらいながら、「学校に行ったら、学校の不備にクレームを出したり、先生が「当たり」とか「外れ」などと言い合うより、学校の先生を助けるようにしてください。そうでないととんでもないことが起こりますよ。安心して小学校へ子供を送り出せなくなるということを考えてみてください。皆さんとしては、学校の先生がその役割を果たせるように応援した方がいい。」と話していますが、いよいよアメリカ並みになってきました。

配布資料の「保育のパラドックス」（添付資料１ http://www.kyorei.ed.jp/visiter/Essay/index.htm からもご覧いただけます）（２００３年２月３日産経新聞掲載)を見てください。保育園を中心にして、左側が経済を中心として一つの循環ができています。右側は家族や社会を中心として循環ができています。１９８５年のプラザ合意を切掛けにして産業界が行政に対して大合唱。さまざまな規制緩和が始まりましたが、その影響を受けて保育園は企業の下請けとして位置づけられました。エンゼルプラン、新エンゼルプランなどは、施策の中身を見てみると、子供のための施策ではなく、経済労働施策であることがわかります。これにフェミニズムが加わって、保育園がグローバライゼーションや市場競争原理の中で企業が闘うことを支える、同時に女性の自立を支えるといった社会的仕組みに組み込まれました。その結果、延長保育、病児・病後児保育、一時預かり、年末年始ほいくなど、さまざまなサービスの拡大を要求され、それが保育園の使命などといわれるものですから、断ることもできず、特別保育事業としてその役割を拡大してきました。

次に、右側を見てください。家庭を中心としたサイクルが描かれていますが、戦後、豊かで便利な社会を求めた私たち日本人が、いろいろな努力を重ねた結果としてはあまりにも皮肉ですが、家族がその役割を果たせなくなったという大きな変化が起きていることを表しています。食、躾など家庭の基本的な機能が失われ、最近では愛も無くなってきた。児童相談所が認知した分でも、昨年４００００件もの虐待の通報が行われるようになった。アメリカ保健社会福祉省の2002年度の報告では、「児童虐待に関係した子どもの数は450 万人。内、裁判所への申立件数は319 万3,000 件で、虐待の事実が実証された件数は89 万6,000 件で

ある。虐待による死亡事例数は1,400 人で、76.1% が４歳以下である。」という報告がありますから、４００００件というのは、まだまだかわいい数字ですが、いずれ日本もアメリカのようになるのでしょう。

保育園は、一方で経済産業界からの要請を受けサービスの拡大が要請される。他方では家庭の変貌を受け、さまざまな家庭状況にある子供たちを保育する。モンスターペアレントなるものも出現してきましたし、とにかくこの１５年、子供たちの変化に現場は驚いています。加えて最低基準を２５％も超えて子供たちを預かるようにとの国の方針、「待機児０作戦」。保育現場では息切れが起こり、いや息切れではなく「キレ」る保育士もでてきた。とにかく子供の心に寄り添うなどというような対応はできない状態が増えています。おかげで、子供たちの問題はそのまま学校に送り込まれ、小学校１年生から学級崩壊、小一プロブレム、１５年立てば、ニートなどという働く意欲の無い若者で溢れるようになる。

産業界の要請で国は保育制度を変革していったのですが、その変革のせいで国や社会の基盤である家庭が崩れ、子供が崩れていく。１５年２０年立つと、そうした子供が育って社会に出て行く。それが更に産業界を困らせ、日本の競争力を弱める。なんとも皮肉なパラドックスですが、経済界が気付いていない矛盾をこの図表は描いています。

国は、現在「次世代育成」という概念へと保育施策を転換しつつあります。この図表が切掛けになったとも聞いています。新保育指針にもそのような傾向が強く伺われます。これはとても喜ばしい兆しと思っていますが、日本の企業の社長さんが、グローバリズム・市場競争原理主義という一種の熱病にかかってしまったと認識し、早く解熱剤を飲むことが必要だと思います。それがないと、日本は変わることができません。多分、本当に困った人間が多数輩出され、会社で新人教育をしようにも手に負えない、社会が犯罪で覆われ、社会不安が広がることになってようやく認識されるとは思うのですが、それでは遅いでしょう。

サブプライム問題から発生した世界金融不安は、まさにアメリカ発の災いが世界を震撼させたのですが、もうそろそろアメリカを宗主国とする宗教から離脱してもよいのではないかと思っています。アメリカに従っていると、お金は吸い取られる、家族は乱れる、子供は悪くなる一方で、ロクなことはありません。

社会を良くしていくには、家庭が命です。その家庭から育っていく子供たちが健全に育てば、社会には健全な善循環がもたらされます。保育園では０歳児から子供たちを保育していますが、子供たちが良く育てば、社会は良くなります。そのような大切な仕事を私たちがしているということを認識し、社会に訴えていくことが必要でしょう。

その保育の世界に、東京都は市場競争原理を持ち込みました。保育園を競争させ、サービスを上げようとしました。すでに市場競争原理はとんでもない事態をもたらすことが結果として分かっていても、行政という大きな船は、３年くらいしないと方向変更ができないのです。保育は非常に高度な技術と資質が要求される仕事です。「人が命」です。質が高い保育を求めるならば、それ相応のお給料が

保育士さんに支払われる必要があります。東京都は保育士の給料について、民間の保育士の給料を公立の保育園の先生と同じように格付けし、低い国の基準との差額を埋めてくれていました。平成１２年には、その制度を廃止し、競争原理に基づいた「サービス推進費」という制度に変更しました。これによって民間保育所の補助額３分の１程度になったのですから、この改革の目的が人件費の削減であったことは明らかです。当時この改革は「基本的には、民間施設を困らせる改革ではなく、むしろ民間施設の経営改革を支援する意味での改革ととらえている。決して今の予算を削ることが目的ではなく、仕組みをかえるということだ」と、当時の東京都福祉局総務部長は回答していますが、それが真っ赤な嘘であったことは、現在の状況をみれば明らかです。削られた５０億円を超える予算は質の危ぶまれる東京都の認証保育所に移し替えられたと聞いていますから何をかいわんやです。その結果、認可保育所では大切な常勤保育士がどんどんパート勤務の保育士に切り替えるという現象も出てきました。これでは保育の質が担保できない。子供が社会の礎であることを認識できない人が保育施策、子育て支援施策をするからこのような結果になるのだろうと思います。

図の一番下をごらんください。心配なのが犯罪の増加でしょう。心の満たされない、不安で覆われた子供たちが育ち、さまざまな事件を起こします。その結果、治安コストの増大がもたらされます。神戸大地震の後の酒鬼薔薇事件あたりからおかしい。今、少年犯罪のサイトを検索すると、「脱人類」というのが出てきます。説明によると、「自然界では育ちようのない、不思議な心を持った青年が育って来ている。」とのことです。それらの青年の特徴は、ゲームや映像などの仮想現実の中で生きている、自分の気持ちを言葉で表現しない、コミュニケーションが取れないという共通した特徴をもっているようです。

話は別ですが、保育園では今、集団感染を予防するためにおかしな事が起こっています。苺を熱湯で消毒した後に食べさせるとか、せっかく栽培した野菜を子供たちに食べさせないとか、変でしょ！マスク・エプロン・使い捨て手袋・ヘヤーキャップのICU集中治療室装備でお餅つきをする、異様な光景とはおもいませんか？その上、ついたお餅は子供たちに食べさせないという徹底ぶり。子供が嘔吐したときには、他の子供を別の部屋に待避させ、保育士はICU装備で完全防御をしてから子供への対応をする。その間、吐いた子供は放置されたりしています。子供の気持ちはどのようなものになっているか、保育士の皆さんだったら想像できますよね。

スタンダード・プリコーション、つまり日常から危機管理意識をもって感染症予防対策を徹底するようにと、保健所は指導します。そうすると、保育室の消毒臭が強くなり、まるで病院のようになります。感染症予防の研修会などへいくと、通常のオムツ交換でも、マスク・エプロン・手袋のICU装備が推奨されたりしている。母親は絶対そのようなことはしませんよね。素手でオムツを交換し、その際たっぷりと肌と肌のスキンシップを行います。ビニール手袋で肌を触られてオムツを交換される子供の気持ちはどのようなものになるでしょうね。想像つきま

すか？ビニールの手袋でお尻や足を触られる。違和感を感じるでしょう。それが脳に刻まれる。人との接触に違和感を持って育った赤ちゃんは「脱人類」になる可能性が高いのではないか、そんな心配をしてしまいます。

どうしてこのような不思議な状況が起きてしまうのかといえば、それは背景に、刑事責任追及が優先されるこの国の安全文化のあり方があります。行政は保育園で集団感染が起こると、起こしたことに対する責任や対応の不備を追求することに躍起になります。保育現場は身を守ろうとしておかしな現象が蔓延していくといった悪い循環が起きているのです。保育園保健協議会の編纂した感染症予防マニュアルはとても優れたものですが、それには「子供の心への配慮」に関する記述が無い。保健所などが作成したマニュアルには、感染症予防だけに集中しています。少なくとも感染症マニュアルには「子供の心」への配慮が必要ですし、行政（東京都）も特別指導検査などをして現場を萎縮させていますが、これは早急に見直して欲しいと思います。

この図の説明の最後になりますが、右の下の部分をごらんください。「心の穴」とあります。心の闇ではありません。「心の闇が見えない」などと言うと、松居先生から、「闇はまっ暗で、見えません」と「突っこみ」が入りますから、心の闇ではありません。「心の穴」です。子供たちの心の中に大きな穴ができているのではないかと心配しています。お母さんと早い年齢から分離されると不安が広がり、安心感・安全感が子供の心から失われます。

子どもの発達の中で、どうやってこの穴を埋めるかが大きな課題だと私は思うのです。教育カウンセラーの内田玲子さんは、「生まれてから１０００日は親が子育てに関われるように国が保障しなくてはいけない」と発言されています。その通りだと思います。0,1２歳児における親子のかかわりの大切さ。母子関係は人間関係の基礎です。我々保育所は母親の代わりにはなれないのです。我々保育士が１００の努力を重ねても、母親の１の努力にはかないません。ちょっと首を傾げるようなお母さんであっても。子供は世界一、自分のお母さんが大好きです。他のお母さんではありません。自分のお母さんです。虐待された子供が保護させて、一週間もするとお家へ帰りたい、母親の元に帰りたいと言うそうです。横浜家庭裁判所調停委員の池田秀子先生がおっしゃっていました。ですから、我々が子供たちに対してできることには限度があります。そうした事を認識すれば、自ずと親が親としての役割を果たせるように支援するということが我々の使命であると分かります。決して親の代替えをすることではありません。そういった意味でも「親心を育む」、「親が親としての役割を果たせるように応援していく」という子育て支援に対する基本認識が大切であると思います。

４．共励保育園の「親心を育てる保育展」

長田先生； 新保育指針の第６章「保育所における保護者に対する支援の基本」

では、子供の最善の利益を考慮すること、子供の福祉を重視すること、保護者とともに、子供の成長の喜びを共有すること、などが規定されましたが、これはこれまでの労働施策一辺倒の考え方から大きく方針を変更したものと考えられます。１９９５年頃から、児童福祉施設である保育所を「働く母親の為の施設」などという人が出始め、その後保育園は、「いつでも、どんな理由でも預かれ」、「それが使命だ」みたいな風潮が流布されていましたが、これを改めるものであると考えています。

品川区も、「利用者本位」という取組みを先駆的におこなってきました。当初、二重三重保育をどう支えるかが課題だったそうですが、最近になって、親の変化が大きな理由だと思うのですが、サービス中心の保育に疑問を持たれ、親と協力して子供たちを育てるという考え方を模索し始めたようです。共励保育園の保育展は、保護者に対して、この１年、子供たちはどのような活動を保育園で行ってきたか、保育園全館を使って１年間の子供たちの遊びや、遊びから作り出された作品、発達の様子、カリキュラム、給食、食育の実践などを展示し、保護者に見てもらうもので、一種の事業報告のようなものです。お爺ちゃんやお婆ちゃん一族郎党そろって来場します。そこでは、子供たちが自分の作品を説明する姿や、子供たちが得意技として獲得した、折り紙や縄跳びやハモニカ演奏など、自分のできることをお母さんやお父さんの前で実演するなど、子供の自尊心や親心が育つような、さまざまな工夫が展示されています。お母さんやお父さんを描いた作品は好評ですね。お母さんから子供たちに出した手紙を展示していたりしますが、涙をさそうような内容もあり人気です。クラス便りも評判です。インターネットの掲示板のように保護者同士のやりとりが、あらかじめ了解の上展示されていますが、お悩み相談とか子供の可愛さなどが保護者同士に共有され、とても良い取り組みであると評判です。こうした、親を取り込んだというか、親と協力して子育てをするという考え方に関心を持たれたと思うのですが、品川区の部長・公立の園長２名・保育士５名ほどの先生たちが共励保育園の保育展にお出でになり、３時間半程過ごしてご覧になっていきました。

５．「子供たちの発達と自分づくり」

長田先生；それでは、「子供たちの発達と自分づくり」の表を見てください。（添付資料 ３　http://www.kyorei.ed.jp/visiter/Essay/index.htm 「子どもの発達の図」からもご覧いただけます）表の横軸は年齢(月齢)を示しています。縦は、「人との関わり」「自分づくり」「言葉」「外界との関わり」、そして「身体の発達」となっています。子どもによって若干のずれはあるものの、必ずこの発達の仕組みを辿って成長していきます。

表の中の黒い太点線はシナプスの量の変化を表しています。中央線がシナプスの成人レベル。シナプスはご存知かと思いますが、神経細胞のニューロンとニューロンをつなぐ接点ですね。このグラフを見て分かるとおり、1 歳でシナプスの数はピークを迎えます。成人の１．５倍です。ネオテニーという戦略ですが、人間はどんな環境でもその環境に合わせて生きていける。脳はそう準備されている。そうした神経ネットワークを持っている。すごいですね、この時期が大切なのです。心地よい体験は心地よさが脳に刻み込まれ、嫌な体験も脳に刻まれます。2001 年の世界子ども白書(ユニセフ)では「消すことのできない刻印」という記述がありますが、その時期に刻まれたシナプスネットワークは、なかなか消す事ができないというのです。「三つ子の魂百までも」という日本の諺と一致します。3 歳までがいかに重要か」ということが強調されています。3 歳児神話は神話といって良いほど、現代科学でも解明されていない人間の不思議さがたくさん隠れているという意味で、昔からの大切な教えと理解しておいた方が懸命でしょう。平成１０年厚生白書では、当時の椋野美智子室長が「三歳児神話は神話にすぎない」と訴えましたが、これは明らかに思慮が浅いといわざるを得ません。母子関係が人間を信じることの基礎となります。ここでビデオを見てください。「

（ビデオスタート「シナプスの変化」）

（ビデオ）；シナプスは脳のネットワークの要です。脳情報のやり取りが多くなるほど、シナプスも多くなります。実際にシナプスの数を数えてみると、生後数ヶ月で急激に増加し、8 ヶ月から 12 ヶ月には成人の 1.5 倍というピークを迎えます。刺激を受けるとシナプスは増え、使われないシナプスは消えていきます。使われるシナプスは、そのネットワークが強化されます。シナプスは最初の日を 100％とすると、3 日後には 10％も減ります。しかしその内容は、もとあったシナプスは 40％も減っていて、それを埋めるように新たに 30％のシナプスが生まれているのです。

（ビデオストップ）

長田先生；いかに 0～3 歳の子供との関わりが大切であるか、脳の中のネットワーク力に影響を与えるかお分かりになるかと思います。使われないシナプスは解けてグリア細胞に吸収されます。この時期、外界から受ける刺激の大切さや、母親を中心とする親との関わりが、大きな影響を及ぼすのです。

さて、表に戻りましょう。５，６歳の発達の特徴から説明して、最近の保育園での子供たちの問題点を考えてみたいと思います。５，6 歳の子供たちはルールを使ってダイナミックに色々な活動をする事ができます。６歳の２段目「自分づくり」の最後に「ルールに従ったほうが、遊びがダイナミックになる」とありますが、こうした発達をとげます。この年齢では、よくサッカーゲームをしますが、

敵ゴール、味方ゴールを理解しないで自分のチームのゴールにシュートなんかしたら大変です。仲間から非難を轟々と受けてしまいます（笑)。その上に四角で囲まれている項目がありますが、これはヴィゴツキーが指摘していることです。「自分自身を意味や価値の世界に従属させるようになる。」すごいですね。たった６歳でこの発達。

そのすぐ上に黒丸で印がしてありますが、「人との関わり」の区分です。「集団の話し合いで、イメージを膨らませる」とあります。言葉を通して他人と話し合いができ、集団でイメージを共有できるようになるのです。作戦を立てたり、役割を果たしたりすることに価値を見出す。中には良い意見を出してくれたり、リーダーとして仲間のトラブルの調整役を果たしてくれたり、「俺についてこい」などというような人物もでてくる。5 歳・６歳というのは、なかなか凄い。このように、保育士でもちょっと惚れ惚れしてしまうとか、とっても素敵な子供の姿を見た経験のある方は多いと思いますが、それ位、この５歳・６歳は人間性というか、人間的にも核のような、魅力的なものが育ってくるのです。

しかし、最近ここ 10～15 年、こうした社会的資質を持った子が減ってきていることに保育現場は悩んでいます。クラス・集団の中で、いつも自分中心で、自分の意見を通そうと躍起になる子、いつも一番でなければ気が済まない子、思い通りにならないと、カッとなってすぐに手を出す子が増えてきました。4 歳クラスの段階でいろいろな現象が明らかになってきますが、クラスが成立しない、集団保育が難しくなってきています。

「どうしてこんな状態になってしまったのでしょう？」それが今日、私が皆さんに理解していただきたい重要なポイントです。

表の 4 歳の所、「人との関わり」の段を見てください。黒丸で「●イメージの言語化ができ､そのイメージを共有することができる」と書いてあります。すごいですね、イメージが言語化できる。つまり言葉を通してお互いの思いやイメージを共有できるのです。言語の獲得が、子どもの社会性を育てるのに重要なファクターであり、大事なプロセスでもあります。ちなみに、子供たちの間でトラブルはよく起きますが、言葉が獲得され、相手に自分の思いを伝えられるようになると、トラブルは減少します。

１歳や２歳クラスでは、「かみつき」が起きます。自我意識が大きく育つこの時期、親も保育士もこの年齢の子に対応するのにキリキリ舞いをするのですが、子供自身でもキリキリ舞いをする時期です。マーガレット・マーラーの指摘によると、この時期、競争心や負けたときの悔しさ、自分にないものを持っている相手への妬みや、自分の気に入ったものへの所有欲や独占欲、かってに相手に仕切られたり、侵入されることへの怒りや拒否、テリトリー意識などが発達分化していきます。こうした中でいろいろなトラブルが起きるのですが、言葉を獲得する

と、自分の気持ちを抑え、言葉を通して、相手の状況や自分の気持ちを理解することができるようになります。すると「かみつき」が減っていきます。言葉の獲得は非常に重要です。

「ことば」の段で、の発達を見てみましょう。１歳半で言葉の獲得というのがありますね。２０語から４０語くらいが獲得されます。2歳では３００語くらい、３歳では５００語から１０００語と、一気に語彙を増やし、言葉を使って表現したり、理解したりする能力を高めていきます。３歳の「ことば」の段に「虚構的知性」と書いてありますね。これは「無いもの・見えないものを考える力」と理解してください。現実にはそこには無いけれど、言葉によってそのことを表したり、伝えたり、理解したり、想像したりする力が、３歳には育ってくるのです。

「人との関わり」の段で３歳の所に「●曖昧ながらイメージの共有が出来始める」と書いてあります。3 歳くらいで、ようやく言葉を通してコミュニケーションが取れるようになり始めるということです。個々のイメージで遊んでいた段階から仲間との世界が広がっていくのです。

「３歳、４歳、５歳の発達の違い」

ここで３歳、４歳、５歳の発達の違いを説明しましょう。

共励保育園では、子供たちがどのように「ことば」を理解していくかという調査を行いました。子どもたちにイソップ物語の「うしとかえる」という話をきかせ、「今の話はどんなだった？」と聞いて、子供たちの言葉を通して子供たちの理解の程度、認識の程度を調査しました。イソップの「うしとかえる」はご存知ですか？お父さんと３匹の子どものカエルが住んでいて、あるとき子供のカエルが野原に遊びに出かけた。そこで大きな牛に出会って非常にびっくりした。いそいで家に飛び帰り、お父さんカエルに報告をする。「お父さん、大変だよ！野原にとっても大きいものがいたよ！」するとお父さんは自分より大きいものと聞いて少々自尊心が傷ついたのか、自分の偉大さを子供たちに示すために無理に自分のお腹を膨らませ、とうとう最後は破裂して死んでしまった、という教訓じみたお話です。

この話を、3・4・5 歳に聞かせ、それぞれに「今のお話はどんなおはなしだった？聞かせてみて！」再話をお願いしてみたわけです。

まず、3 歳。この年齢に特徴的であったのは、話がいろいろなところへ飛んでいってしまうということです。とくに、お話の中で「パーンとお腹が破裂してしまいました。」というところに強く印象づけられたのでしょう。多くの子が「ぼくんち風船あるもん！」といった具合に、話を自分の連想で広げてというか、勝手な話をするケースが多かったことです。かつて「さんまのスーパーからくりテレビ」の「御長寿早押しクイズ」という番組がありましたが、それと同じように、一つの言葉を切っ掛けに、どんどん話が主題から離れて、というか自分のイメージで話を返していく。最終には下ネタに落ち着くのですが、それを想像していた

だければ結構だと思います。そんな訳で、３歳児とご老人はとても相性がよいのです。（笑い）

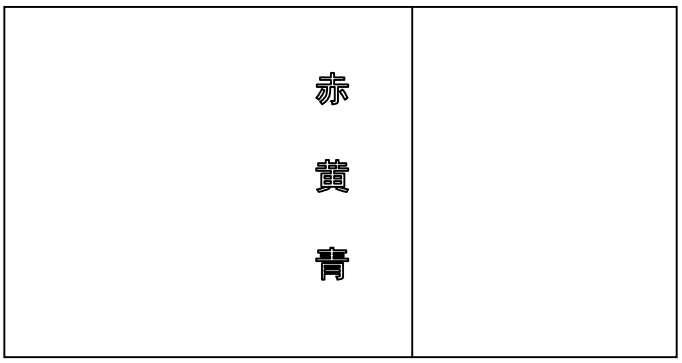
　でも、こうした、イメージをきっかけに自分の感じたこと、思ったことへと話を展開させていく力は、相手の話を聞いて、それに応えるような内容を返していく力はまだまだ十分ではないのですが、この連想する力は、一つの事柄を別な事柄へと関連づける力として働き、やがていろいろな概念を獲得するためにとても大切な役割を果たすようになるのです。この年齢における重要な発達の姿なのです。

　次に４歳児。4 歳は真面目なんですよ（笑）。「どんな話だった？」と聞くと、「むかし、あるところに・・・」というように、物語の最初から最後まで話を丁寧に再現しようとします。多分、4 歳児というのは、世の中の仕組みを自分の中に取り入れようとしているのではないかと思います。３歳児の直感・連想的な段階から、自分が見たもの、経験したものの仕組みのようなものが見えてくる。それがどのようなものであるかを自分の中に取り入れようとするときに、何らかの基準や価値を手立てとする。そうした段階に入っていく年齢だと思います。４歳児はいろいろな物事を受け止めるのに一つの基準を求めている、自分が判断する基準を求めている時期ではないかと思います。ですから、世の中はこうですよと規範を伝えるには、とても良い時期です。
　正月休みの前、園児たちに脳内のネットワークが描かれた図を見せて、「ゲームはいけません。脳の中はこのようにいろいろな配線でつながっているけど、ゲームをすると、ゲームの悪魔がハサミを持って現われる。みんなの頭の中の配線をチョキチョキ切ってしまうんだ。」と話しました。その話を聞いた４歳児は、話の後に私のソバに寄ってきて、「理事長先生、僕はゲームを止めました！」と確かな決意を持って私に話してくれます。これほど４歳児は真面目です。かの哲学者ショーペンハウエルもこう言っています「子供に、嘘だろうが本当のことだろうが、心を込めて、真剣に繰り返し、繰り返し話すと、子供はそのことを信じる」と。４歳児になると、助詞や助動詞、接続詞など、日本語のきまりに沿った話し方を獲得していきます。まさに、仕組みや規範を受け入れている時期と言えるでしょう。

　さて、５歳児。5 歳児はなんて答えてくれたと思います？「カエルのお父さん馬鹿じゃないの？」と。（笑）つまり、物語の粗筋から見えてくる意味や価値を理解するようになるのです。発達の表の６歳児の「人との関わり」と「自分づくり」のところに「自分自身を意味や価値の世界に従属させるようになる」と書いてありますが、これはヴィゴツキーの言葉です。だんだん人の心の裏側が見えてくる時期です。物事の表面の裏側、本質を掴む力が出てくるのです。

　☆ バロン・コーヘンの実験「他人の気持ちの理解」

加えて、３・４・５歳児の認識の発達の違いを理解するのに、バロン・コーヘンの実験が助けになります。



左（上）図のような、部屋の左側には赤・黄・青の３つの箱が置かれています。ガラス窓で仕切られた右側の部屋には、子供がいて、ガラス越しに３つの箱に起きる出来事を見ています。調査は３・４・５歳児に行いました。

子供たちが箱を見ていると、部屋に、ある人が入ってきて、「赤」の箱の中にプレゼントを入れます。そして、その人は部屋の外へ出て行きます。すると、別の人が入ってきて、前の人が入れた「赤」の箱からプレゼントを取り出し、「黄」の箱に移し替えて出て行ってしまいます。しばらくすると、一番最初の人がプレゼントを取りにもどってきました。

さて、ここで質問です。「この人は何色の箱の中を探すでしょうか？」という実験です。

結果ですが、3・4 歳児は間違いなく「黄！！」といいます。何故か？それはプレゼントは黄色の箱に入っているからです。つまり自分の知っていること、自分を基準にして判断しているからです。まだまだ相手気持ちや相手の立場に立って考えることは難しいようです。

ところが、5 歳児は「あの人は「赤い箱」を探すだろう」と答えます。つまり、相手の立場に立って考えることができるようになります。ですから、5 歳児は侮れないのですよ。保育士の心の内などは、しっかり理解しています。私は、保護者に「夜９時からのトレンディドラマを５歳児と一緒に見てはいけません。恋の手練手管からいじめの作法まで、すっかり学んでしまいますよ！」と忠告をしていますが、５歳児はそれほどすごいのです。（笑）。

さて、本題にはいります。最近、こういう発達をする 3・4・5 歳児の姿が見られなくなってきた。と、いうか子供の社会的力がとても落ちてきたということに気付いています。発達の表の「自分づくり」の項目３歳半から４歳半のところに「他者を受け入れる自我（気持ち）と、自己主張の矛盾増大」と書いてあります。

言葉を獲得した子供たちは、ルールなどを手がかりにして友達との世界を広げていきますが、それがどうもうまくいかない。５歳児になれば、相手の気持ちや立場なども、言葉やルールを通してなんとか調整していく力が育ってくるものですが、４歳児・５歳児の集団でトラブルが続出というか、相手とうまくやっていけない子が非常に多くなっているのです。「社会的な自我」が育っていないのです。

では、どうしてそうなってしまったのか？これが今回のお話の重要なポイントです。

表の「自分づくり」１８ヶ月の所を見てください。「自我」と書いてあります。「自我が雨後のタケノコのようにニョキニョキ生えてくる」とあります。この「自我」というのは、「パッション」です。「生きる力」です。時には大好きな母親を敵にしてまでも自分の主張を通そうとする。主張が通らないとひっくり返って泣き叫ぶ、など、結構大変な状況が起こります。

この時期には、競争心や負けたときの悔しさ、自分にないものを持っている相手への妬みや、自分の気に入ったものへの所有欲や独占欲、かってに相手に仕切られたり、侵入されることへの怒りや拒否、テリトリー意識などが発達分化していきます。母親や保育士も「キレ」るような状況に追い込まれるほど、この自我は強烈です。しかし、この時期の葛藤を親や周囲がどれくらい、その子の身になって受け止めることができるかにより、その子の人格構造の土台が良くも悪くもなる、とマーガレット・マーラーは言っています。世界乳幼児精神学会の渡辺久子先生などは、「この自我が十分育っていかないと、思春期には心が生煮えになり、必ず将来悩む」と言い切っているくらいです。

引きこもりとか、コミュニケーションが取れないとか、リストカットとか、子供たちの心の異変については、たくさん指摘されていますし、身近な人にそのようなことが起きている人も多くなっていますから、この問題について、真剣に考える必要があるでしょう。

表の「自我」の上の所を見てください。「自分の気持ちが受け入れられたという体験が、他人の気持ちを察することができるようになる。」と書いてあります。「ああ、そうなんだ、〇〇したかったんだ！」とか「これが、欲しかったんだ」とか、一度「自我」の出所である子供の要求を受け止め、言葉で返してあげる。これが非常に大切で、仮にその要求が叶わないものであったら、「でもね、これは誰々ちゃんのものだから、あなたのものではないのよ。代わりにこっちのオモチャはどうかしら？」と切り返してあげる。

つまり、こうしたやりとりを通して、子供は相手の気持ちを察する力を育てていくのです。もう少し表の上を見ると、「大好きな人の言うことがルールとして育っていく」と書いてありますね。大好きなお母さんが「いけません」と言うから、諦める。大好きなお母さんが悲しむから、自分の気持ちを抑える。そうしたお母さんとの関わりを通して、自分をコントロールする力や、相手と何とか調整して

いく力を育てていくのです。
　３歳・４歳における「他者を受け入れる自我と自己主張の矛盾増大」というのは、こうしたお母さんとの関わりを支えにしながら、子供は他人と関わる力、社会性を育てていくのです。ですから、この自我が強烈に出る時期、昔で言えば「三つ子の魂百までも」の時期ですが、この時期がいかに大切かを昔から言い伝えているということを、改めて認識する必要があると思います。

　そこで、母親や保育士が、十分子供の気持ちを受け入れてあげるという対応が大切になってくるのです。自分の気持ちが受け入れられたと感じた子供は「コクン」と頷き、気持ちを切り替え、次の段階へと進んでいきます。

　もちろんこの自我に対応するには、簡単に事が運ぶわけはありません。それこそ子供との対決として真剣勝負などということもあるわけです。
　しかし、子供の方も、いつまでも駄々をこねている段階で留まってはいません。一度経験した中から、次の道を探る力は十分備わってきます。１歳半ごろからは、二つの選択を提示してあげると、ダダコネを切り上げ、どっちか一つの方を選択して、自分の気持ちを切り替え、次のステップへと進んでいきます。

「忙しすぎるお母さん」
　　ところが、この強烈な自我に十分対応してあげるだけの余裕と時間がお母さんに無い。そのことが大きな問題なのです。お母さんが忙しすぎるのです。
　子供たちは、世界一大好きなお母さんに、「依存し反抗」しながら、自我を築き上げていきます。先ほどの「保育園のパラドックス」の右下の心の穴のところに記述されていますが、まずお母さんに依存できることが大切。そのお母さんとの信頼関係を土台にして自我（自分）を出していく、ということです。つまり依存ができなければ反抗もできないということになります。
　そのお母さんが忙しい。仕事優先。時には、自分優先という傾向が強くなっている。ですから、子供が自分の自我を十分出すことができなくなる、ここが問題だと思います。

　最近、この自我を十分出さない子が多くなっている気がします。こうした子は、非常にお母さんに気を遣っています。お母さんを手間取らせない。いわゆる「いい子」を演じるようになっているのですが、お母さんも必要以上によい子でいることを子供に要求する傾向があります。
　中には、子供を小さいうちから集団に預けると社会性が育つと勘違いされているお母さんが多くなっているという感じがします。これは大きな勘違いです。これまでお話してきてお分かりだと思いますが、０１２歳児の間の母子関係、特に大好きなお母さんにいつも支えられているという安心感や安全感が刻まれないと、子供は他の人間に対する信頼感も持てなくなりますから、こうした勘違いは早くお母さんたちに伝える必要があると思います。

もとろん待機児問題があり、生活の問題があることは十分理解しているのですが、子供が保育園に入園できないということになると仕事ができないという心配があるためか、焦ってしまう方も多いとは思います。
中には、０歳の入園前の段階から「保育に欠ける」という状況を意図的に作りあげ、入園のポイントを上げるというようなお母さんの対応も出てきました。子供より仕事が優先される。保育園に入園させるために、自分の大切な子を未認可施設やベビーホテルなどに預け、入園のポイントを上げるというようなことは、本末転倒というか、子供が安易に預けられたときの心の状況、知らないところへ突然預けられ、大好きなお母さんと別れ別れになる不安を想像してみる必要があります。何が脳に刻み込まれるのでしょう。

平成１０年に厚生白書が発行され、その中で「三歳児神話は神話にすぎない」と当時の室長である椋野美智子さんが書きました。その年を切っ掛けにして子供を保育園に預ける親が急増しました。しかも０１２歳児の子供が多く預けられるようになりました。この厚生白書でテーマにしたのは、三歳児神話ですが、１９９２年の国立社会保障・人口問題研究所の調査では、「少なくとも子供が小さいうちは自分の手で育てたい」と思う母親が８９％もいました。ほとんど９割の母親がそう思っていた。ところがこの厚生白書が出た後は、一気にそう思う母親が減ったということです。２００４年の調査のときには、７４％にまで減っていますから、０１２歳の子供たちを預けるようする母親が一気に増えたわけです。保育所が足りなくなるわけです。自然界の法則ではシェアーが７０％を切ると、一気に４０％台まで落ち込むと言われています。ほとんどの０１２歳児が保育園やその他の保育施設に預けられるようになるということは、何を意味するのでしょうか。真剣に考えないと、大変なことになると私は思うのです。
ソビエトも、中国もイスラエルも子供を社会で育てようとして失敗している。なぜそれを日本でやろうとしているのか、私は不思議でなりません。椋野さんには、責任を取ってもらいたいと本当に思っています。

余談ですが、保護者の方には、入園時に、「今の皆さんの年齢に４０年を加えてください。」とお話しします。すると、子供たちは４０歳から４５歳、親たちは７０歳から７５歳にもなりますか。「そうなったら、皆さんは逆に子供たちから、さっさと施設に預けられてしまいますよ！」「八王子の山奥にはそうした施設がたくさんあり、だれも面会に来ない老人でいっぱいですよ！」とお話します。

さて話を戻しますが、私が強く指摘したいのは、この自我が育つ人間の発達において非常に大切な時期に、お母さんが十分な時間と余裕を持って、子供に対応することをしていないのではないか、ということです。それが、子供の心

をいらだたせたり、不安にさせたり、生煮えにしてしまうという現象を引き起こしているのではないかと思うのです。こうした子供の問題が、実際に保育士が保育現場で悩む問題として広がっていくのです。現実に我が園の２歳児３歳児にそのような傾向が見えることは確かです。

それを解決するのは、会社の社長さんしかありません。働き方を見直してもらうしかありません。「家族が成り立つ働き方」が実現されるようにならなければ問題は解決しないでしょう。ところが、子供が病気で休み続けると会社を首になってしまう、育休を取って復帰しようとしたら解雇されたとかいうようなケースが多くあると聞いています。こうした社長さんには、子供がきちんと育てられなければ、やがてご自分の会社も人材で困ることになるでしょう。と伝える必要があります。現在、私は会社の支店長さんとか、お母さんを雇う上司の方に、皆さんにお配りした、「保育園のパラドックス」と「子供の発達の表」を説明して歩いています。先日、商工会議所の会頭さんに説明しましたところ、考えても見なかったと驚かれていました。そうした日本の社会情勢ですが、デンマークとまではいかなくても、日本でそうした問題を解決している会社があります。未来工業などという会社は、社員に残業はありませんし、社員を大切にしているそうです。やろうとすれば日本でもできることを証明しています。要はリーダーの心持ち次第でしょう。

さあ、この図の説明も最後になります。

１８ヶ月をもう少し遡って、もう少し左、６ヶ月のあたりを見ていきましょう。「基本的信頼感」と書いてありますね。これはエリクソンが言っています。１歳半頃から強烈な自我が芽生えますが、その自我が十分育つようにするには、それを支える「基本的信頼感」というのが母子間に構築されなくてはなりません。パラドックスの図にもありますが、大好きな母親に「依存し、反抗する」ということで、依存ができるような信頼関係ができていないと、反抗することもできない。子供がこの人に無理難題をふっかけても、けっして反対に攻撃されるようなことは無いというような確信が、心の中になければ、相手に我が儘は言えませんよね。うっかり我が儘したら、ひっぱたかれた、などということが起こるとすれば、子供はそのような我が儘は出さなくなりますね。反抗もできなくなります。つまり、母子間の信頼関係ができていないと、子供は自我をぶつけることができなくなるということです。

その「基本的信頼感」というのは、生まれて、お腹が減ったらおっぱいをもらう。オムツが濡れて気持ち悪くなったら、オムツを交換してもらう。不快な状況から快適・さっぱりという状況に改善してもらう。このような心地よさが繰り返されることによって赤ちゃんとお母さんとの間に強い信頼関係ができます。子供の脳に、この人と一緒なら安心であり、安全であるということが刻み込まれると、「この人でなくてはダメ」というように、強い愛着関係が築かれま

す。そうすると、人見知りや後追いが始まります。その愛着関係を土台にして、安心感・安全感を感じながら子供は強烈な自我を出し、自分づくりを始めるのです。

ですから、この愛着関係が強くなければ、次の自我の出方も十分でなくなるというわけです。いや、愛着関係の程度に応じて自我の強さは、大きくも小さくもなるという訳です。

よく、この子は親想いのいい子だったとか、人見知りもしない、いい子だとか言われることがありますが、これらは、どちらかというと親の手間をかけさせないという意味で「いい子」ですが、愛着関係がしっかり築かれていれば問題はないのですが、子供の方が親との関わりを諦めてしまっているのではないかと心配するような子も出てきており、そうした場合には、親に子供の心の状況を正しく伝える必要があるのではないかと思います。

「まとめ」

ではこれまでの話をまとめてみましょう。子供は、その発達の特徴として、３４５歳で人と関わる力、社会的自我が育ってくるのですが、どうもそれがうまく育っていない。保育園における子供たちのトラブルの原因に、相手のことを考えたり、察したりする力が育っていないということがある。その原因はどこにあるかと探ると、どうも１歳半から３歳頃までの自我の育ちに問題がある。

子供の自我は、それを支えてくれる母親との関わりの中で育つが、強烈な自我に、母親が十分対応できていない。この時期の葛藤を親や周囲がどれくらい、その子の身になって受け止めることができるかにかかっているが、親が仕事や自分のことで忙しく子供との時間がとれていない。また、子供は早くから保育園に預けておけば社会性が育つと勘違いをしている親もいる。

子供の自我は、母親との基本的信頼感によって支えられて初めて育つ。大好きな母親に依存し、反抗しながら自我を育てるが、その母親との信頼感が希薄だと、自我も生煮えになる恐れがある。

こうした問題を解決するには、親が０１２歳の時期に十分関わることができる余裕と時間を社会が保障することである。デンマークはその事を早くから気付き、社会の仕組みを変えてきた。日本も会社の社長さんが気付けば可能性がでてくる。日本の会社の中には、残業も無く社員を大事にする会社もあり、やればできるようだ。行政は何をするか？会社の社長さんのことばかりを聞いているだけではなく、施策を担当する者として、もっとすべき事はあると思います。

最後に保育園の真の役割を確認しておきたいと思います。保育園の真の役割とは、「子供の成長を通し、親が幸せや喜びを感じ、親としての役割の大切さを学んでいきながら、親として育っていく。」親が親の役目を果たせるように支援

する。これが真の子育て支援だと、私は思います。

７．劇遊び「あいうえお王国のお話　お嫁さんにできるか？の巻」

長田先生；それでは最後に５歳児の姿をビデオで見ていただこうかと思います。年長になると、社会的な自我が育ち、みんなと話し合いでいろいろな活動を展開することができます。

共励保育園の年長組は、運動会の後、２ヶ月をかけて劇遊びを展開します。この劇遊びは、既存の絵本や物語を再演するのではなく、自分たちで話し合いながら、自分たちが舞台の上でやりたいことを実現していく、といった劇遊びです。

これから見ていただく「あいうえお王様　お嫁さんにできるのかの巻」は、この劇の主人公である王様が、「僕はＳちゃんと結婚式がしたい！！」と言い出したのが始まりです(笑)。基本的には子供たちの要望を実現させてあげるのが、共励の劇遊び活動の基本理念ですから、保育士は子供たちの要望を受け止め、それを劇の中に組み込んでいくという仕事を受け持つ訳です。集団で話し合いながらイメージを共有できる年齢ですから、時間をかけて、子供たちと話し合っていきます。

別に元気な男の子たちがいまして、この子たちは「シンクロやりたい！！」という要望をだしてきました。一人の男の子のお父さんがレンタルビデオ店から「ウォーターボーイズ」という映画を借りてきて、家族で見たようで、どうしてもその中で男の子たちが実演する「シンクロナイズドスイミング」をやりたいというのです。クラスにはお淑やかな女の子もいるのですが、「お姫様になってあやとりをみせたい！」「ハモニカでイントロクイズをしたい！」などなど。各自色々な希望を言ってくるので、それらをまとめて劇にするのは、それこそ大変な訳です。どんな劇になるか、それでは、ご覧ください。

（ビデオスタート）

「あいうえお王国のお話　お嫁さんに出来るか？の巻」

舞台は森の中

舞台上に、忍者装束の男児数名が登場。曲ベンチャーズのダイヤモンドヘッドに乗ってシンクロらしき！？動きを披露。これは忍者の修行のつもり。そこへ忍者の妹（ヒロイン）登場。妹は忍者たちの食事を作ってくれる大切な人である。妹がつくってくれた美味しいおにぎりを食べた後、忍者達は妹に修行に出かけるといって退場。妹も退場。

忍者達が帰ってくると、妹の姿がなく置き手紙が残っていた。「お嫁さんにするのでお城につれていく。あいうえ王様」、とある。そこで、忍者達は妹を取

り返すためにお城へ向かう。（退場）

森のリス役の女児数名、ハモニカを演奏しながら登場。輪になり、こだわりのダンスステップを踏みながら一列になる。そこへ忍者登場。忍者曰く「お城に早く行きたいので、木の所の近道を通させてください。」。リス曰く、「お城へ行くためにここを通りたいなら、イントロクイズをして私たちに勝ったら通させてあげる」と。りすたちは、自分の知っている曲のイントロを吹き、忍者はそれに答えるという勝負。何とか正解７不正解３で忍者が勝ち、近道を教えてもらい、忍者はお城へ急ぐ。

（場面転換）暗幕の前にお姫様姿の３人の女児。あやとり上手な隣の国のお姫様という設定らしい。王様を待つ間、それぞれがあやとりを披露（拍手）。（暗転）

暗幕があき、場面はお城の中。大臣・猫・お姫様が待っていると、そこへ忍者の妹を連れて王様が登場。大臣が王様を叱責「勝手にいなくなっては困ります～」。王様、理由を述べる「森で遊んでいたら女の子にあって、しりとりながらここまでつれてきたと。」いきなり王様、妹にプロポーズ！？「お嫁さんになってください！」（場内爆笑！？）妹「ど～しよ～かなぁ？まだお兄さんたちに相談していないから・・・」（又爆笑）。

そこへ忍者の兄達登場！「妹を返せ！」妹の取り合いが始まる。見かねた大臣が「言葉ゲーム」での勝負を提案。言葉ゲームとは、カードに一つずつ文字がかいてあって、その文字を組み合わせて意味のある言葉を作るゲーム。忍者チームと王様チームに別れ、先に10個作ったほうが勝ち。

妹「どっちの味方もできないから、審判をしまーす」（作った言葉が正しいかどうか判断するということらしい）

妹「よーい、スタート！」

一人ずつ、言葉を作り、舞台中央の黒板に貼っていく。妹役の女児が判断し、オッケーなら、次の言葉を貼ることができる。出だしは順調。しかし、忍者兄軍団の中に字を読むのが苦手な子がいて、悪戦苦闘。他のチームメイトが教えると反則になるらしいのだが、忍者軍団は外野からあーでもない、こーでもないと結構うるさい！？（場内笑いの渦）この勝負、毎回真剣勝負らしく、どの子も勝つために必死の形相。

最後は王様チームが「うり」という言葉で 10 個達成！勝ちとなる。忍者たち「くやしい！くやしい！」と地団駄を踏んでいる。大好きなお母さんの前で

は、この勝負は絶対勝ちたかったらしい。王様は意気揚々改めてプロポーズをしようとした。しかしっ！！なぜだか忍者軍団がうるさい。「うりって何？」と。どやら忍者チームは「うり」を知らなかった。いよいよプロポーズのクライマックスに、劇の流れを止めるような挙動に出た。それに大臣が答える。「食べ物？」「つけもの！！」（場内大爆笑）。漬物を知らない忍者は納得しない！王様そっちのけで「うり騒動」が始まってしまった。おかげでクライマックスがすっとんでいく（場内大爆笑）。プロポーズしようとした王様も、舞台の中央で唖然としている。

そこへ、無理やり！？ハモニカを吹きながら、リス軍団登場。騒いでいる一団を押しのけ、『きらきら星』を演奏して、劇を締める。めでたし！めでたし！幕が下りる。（お終い）

（ビデオストップ）

長田先生；5 歳児には、話し合いを通しイメージを共有できる。ストーリーという約束のなかで、自分達の役割や世界を作る事ができるのです。皆と一つの価値を共有できる。ルールを守らなければ劇が思う白くなくなる。ルールを守る大切さを知る。本来はこのような姿が育ってくるのです。

しかし、今ここが出来なくなってきています。親との関わりが少なくなり、「基本的信頼感」が子供たちの心の中に育ちにくくなっている。強烈な自我を受け止めてくれるべき母親が仕事に、そして自分に忙しい。早くから保育園に預ける事が社会性を育てると勘違いしている。こうした事を見直さなくてはならない。保育園はとても大きな可能性を持っています。保育園の活動を通して、子供は大きく成長していきます。その成長を通して親は、幸せや喜びを感じ、親としての役割の大切さを学んでいきます。保育園の行事に親を引き込むことによって、親は子供のことを理解していきます。先生の大変さも理解してくれるようになります。親も変わっていきます。親が保育士を信頼してくれ、保育士を支えてくれる。だから先生も大変な人数の子供たちを保育することができる。親に支えられた保育士は幸せです。保育士が幸せでなければ子供たちは幸せになれない。保育士は専門的な勉強を重ね、良い環境、発達を保障する意味のある活動を子供たちに返していく。子供たちの発達を保障することが保育士の使命です。単に預かるだけでは、その使命は果たせません。そうした現場の努力が「保育の質」を支えることになります。そうした保育士の努力を支えることが園長や行政の役割だと思います。

保育園の活動を通して、次の社会に役立つ子供たちを育てることが大切であると、本当に思います。

以上